

■ 葬式は歴史を感じてよい時間

もう2ヶ月以上前のことになってしまったが、この9月に義父が死んだ。一緒に夕食を始めた直後に私たちの目の前で倒れ、胸が痛い痛いと言って救急車で運ばれ、病院に運び込まれたときには既に人事不省の状態になっていた。残念なことに、そのまま意識を戻すことなく亡くなってしまった。

病院を出た後、義父は自宅に戻り、いつもの彼のベッドで4、5日を過ごした。最期に火葬場に向けて家を出るにあたっては、義父も含めてその場にいた誰一人もキリスト教徒ではなかったにもかかわらず、キリスト教の文化を愛していた義父のことを皆で想い、彼が好んだ賛美歌をYoutubeで捜してbluetoothでスピーカーに繋ぎ、それに合わせて歌ったものである。

やはり時間は不可逆に進んでいる、あるいは、そういうようにしか体験できないということを示している一連のできごとだった。私たちは、過ぎ去った、というかたちでしか「時間」を見ることができない。個人的な感傷だが、おそらくここ数年間は、私にとって、自分の人生の中で最も幸福な時期として、後に思い出される時期だったのではないかと思う。息子が成長すれば、そのぶん祖父母たちは歳をとるという（あたりまえの）ことだ。

その出棺前後の数日は、親類で家族アルバムを改め、彼の一生をたどる時間となった。個人的には、1938年にサンフランシスコより差し立てられた、義父の父（妻が会ったことのない祖父）からのハガキが興味深かったし、ほかに^{やないほらただお}矢内原忠雄東大総長の写真が巻頭を飾る卒業アルバム、有名教授たちの名前が並ぶ法学部の成績表、昭和の銀行マンたちの職場における数々の行事を記録した写真（がいちいち丁寧に残されているもの）、義母や子供たちとの愛情溢れる写真が印象的だった。立派な人だったのは間違いない。

アルバムの写真に刺激され、様々な思い出話が交錯する。義父と直接に血が繋がっていない分、私にはそうした過去の話の一つ一つが興味深かった。そしてもちろん、アルバムには、義母やその子たちにも分からない部分が残されている。端的には「これどこ？」とか「これ誰？」というもので、それぞれの断片的な知識がつきあわせられ、それが推理されてゆく。

それだけではない。義父が保管していた様々な過去の書類や記録も出てきた。なかでも印象的だったのは、義父の母方の祖父の遺品である。この人は軍人で、小さな紙箱からは、日露戦争（1904-05年）の^{きんしゅうなんざん}金州南山の戦闘で負傷したときの肌着、團山寺附近の高地で敵砲弾により負傷したときに着用していたという袴が出てきた。また一緒に、士官学校の卒業証書、騎兵実施学校の成績、部隊への配属に関する書類（免・補）や階級の昇進の辞令類、

清国皇帝から勲章を授与されこれを佩用^{はいよう}してよいかに関する許可書、位階の叙任などの書類、その後大正時代におけるシベリア出兵の勲章、在郷軍人として地域で活躍したらしい時代の書類なども出てきた。

あくまで「昭和」の話だと思っていたのが、急に「明治・大正」が近くなった。(無精で申し訳ないが、便利な) ネットで調べてみると、陸軍士官学校の同期には、首相を務めた林銑十郎や二・二六事件で犠牲となった渡辺錠太郎がいたことが分かり、昭和戦時期の年表が思い浮かぶ。それら「大物」であれば違っていたかもしれないが(それでも研究者以外にとってはあまり意味のない固有名詞だろうが)、親類でさえ「軍人であった」という以上の知識が伝わっていなかったことが却ってリアルでもあった。

各辞令や叙勲の書類がかなり丁寧に保管されていたこと、保管された血染めの肌着、在郷軍人会への推薦の書類などから、彼が大正時代の地域(香川)にあって、この時代の「戦争体験の風化」に抗し、その「継承」に務めていたであろう様子も想像してしまう。かつて学徒兵として戦争を体験した評論家の安田武が提起していた、日露戦争の戦争体験とアジア太平洋戦争の戦争体験の関係という問題、つまり前者が一種の「規範」となって、昭和の戦争の時代を形作っていったという点である。

日露戦争と満州事変のあいだは26年間。2017年の今から考えれば、1989年の冷戦の終結(マルタ会談)や91年の湾岸戦争前後くらいにあたる間隔だ。しかもこのあいだに、第一次世界大戦やシベリア出兵が挟まる。その意外な「短さ」を、彼の人生に垣間見ることができるわけである。(この義理の曾祖父については、もう少し調べてみようと思う)

繰り返すように、この連載では「体感する歴史」をテーマにしている。

人の一生は、過去を「体感」する、かなり分かりやすい尺度のはずだ。そしてそれが尊重される葬式という場合は、その絶好の機会であるはずである。そして今回のように、さらにその人が受け継いで大切にしていたものも含めれば、ざっと100年くらいまでの時間を「体感」する手がかりが見えてくる。アルバムをめくり、Wikipediaで調べるだけでもいいはずだ。

そしてどんな人にも必ず「歴史」との接点がある。これを逃す手はないだろう。